地 誌

#28

そうちゅうざっし

相中襍志

みうら・よしかた

作者：三浦義方(1781-1856)

成立：天保10年代(1839-1844)？

解　題

小田原・箱根を中心とする相模国の地誌。書名の「相中」は相模国内の意、「襍」は「雑」の異体字である。小田原地方史研究の基本史料の一つ。

成立と諸本

翻刻本『相中襍志』の解題で、石井富之助(小田原市立図書館長・当時)は、この史料について次のように書いている。『相中襍志』原本は小田原藩士・三浦義方の著作で、成立年代は天保10年代と推測される。この原本は旧藩主の大久保家が所蔵していたが、昭和20年(1945)の戦災で失われた。翻刻の底本となったのは、久保田慶三が大正14年(1925)に原本を大久保家から借りて筆写した写本である。久保田は旧小田原藩士が明治期に組織した団体・小田原有信会の会員だったので、この写本は他の小田原有信会所蔵資料とともに昭和37年(1962)小田原市立図書館に寄贈され、現在は同館の特別コレクション「小田原有信会文庫」の１点となっている。『相中襍志』の写本はこのほかにも数点作成されたことが知られているが、石井によればそれらはすべて失われたという。ただ、国立公文書館の目録によれば、明治期に写されたと見られる『相中襍志』写本が同館内閣文庫に所蔵されていることが確認できる。

また、小田原の郷土史家・片岡永左衛門は大正12年(1923)関東大震災の瓦礫の中に『相中襍志』写本を発見し、これを大幅に改訂増補して『増補相中雑誌』２冊を翌13年に完成した。これは、片岡がその後も改稿を続けた原稿とともに小田原市立図書館の特別コレクション「片岡文書」に収められている。原本を伝えるものでは

Keyword

- 小田原
- 箱根
- 石井富之助
- 久保田慶三
- 小田原有信会
- 片岡永左衛門
- 「増補相中雑誌」
- 神奈川叢書
- 私撰地誌

ないが、関連資料としての意義をもつという。

作　者

原著者・三浦義方について伝えられていることは少ない。ここももっぱら石井富之助の解題により紹介する。義方は天明元年(1781)小田原藩士の円城寺家に生まれた。通称は寛作、養子として三浦家を継いだ。小田原藩家臣としての役職等は不明であるが、墓碑銘から剣術と槍術の師範だったことがわかる。また、義方は和歌・俳句にもすぐれ、特に俳句では完策の号で当時の小田原俳壇で注目される存在だった。このような文人的素養をもつ義方が郷土の地誌執筆に取り組み、書き残したものが『相中襍志』であるといえよう。安政３年(1856)義方は76歳の生涯を終えた。

内　容

底本は和装本３冊で、各冊は智・仁・勇の巻次をもつ。400字詰原稿用紙に墨書され、智の巻126枚、仁の巻100枚、勇の巻41枚の分量がある。神奈川叢書刊行会の翻刻本は、智１冊、仁・勇をまとめた１冊の２冊から成る。内容は、史実・伝承・史跡・人物・墓所・社寺・山川等、多岐にわたり、小田原城・小田原北条氏・曽我兄弟・箱根権現等、地域性の感じられる項目が目立つ。記述は、歴史書や古文書の引用が非常に多く、客観性を重んじつつ、一部には著者自身の見聞も記されている。また、記述の対象となっている地域は、小田原・箱根でほぼすべてを占めるが、大磯から保土ヶ谷までの東海道や、鎌倉・藤沢・座間・海老名・伊勢原等の史跡・社寺に言及している箇所もある。

ただ、本書各項目の配列は、関連するものをある程度まとめているものの、全体としては全く体系性を欠いて順不同である上に、重複する部分も散見される。これは本書が完成された著作ではなく、三浦義方が折にふれて書きためていた準備的原稿であることをうかがわせるものである。したがって、同時期に編纂された『新編相模国風土記稿』に比べれば、完成度の低い私撰地誌といわざるをえないが、『風土記稿』にはない記述も見られ、小田原藩士にして初めて残しえた独自な記録であることはたしかである。なお、石井富之助は前記解題において、本書と『風土記稿』編纂の間に何らかの関連があるかどうかはわからないが、おそらく義方の趣味による個人的な研究であろうとしている。

翻刻本に索引はないが、写本にはない目次が作成され、項目が一覧できる。

史料本文を読む

＜翻刻本＞

●『相中襍志』２冊　三浦義方著　石井富之助解題･校訂　神奈川叢書刊行会 1966-1967（神奈川叢書　第４・５編）［K08/3/4～5］